庭の中の涼しい朝、神秘的な森の外れの夕方、④ぼくはまるで宝を探す人のように、網を持って待ち伏せていたものだ。そして美しいチョウを見つけると、特別に珍しいのでなくったってかまわない、日なたの花に止まって、色のついた羽を呼吸とともに上げ下げしているのを見つけると、捕らえる喜びに息もつまりそうになり、しだいに忍び寄って、輝いている色の斑点の一つ一つ、透きとおった羽の脈の一つ一つ、触角の細いとび色の毛の一つ一つが見えてくると、その緊張と歓喜ときたら、なかった。そうしたビミョウな喜びと、激しい欲望との入り交じった気持ちは、その後、そうたびたび感じたことはなかった。

ぼくの両親は立派な道具なんかくれなかったから、ぼくは自分の収集を、⑤古い潰れたボール紙の箱にしまっておかねばならなかった。びんの栓から切り抜いた丸いキルクを底に貼り付け、ピンをそれに留めた。こうした箱の潰れた壁の間に、ぼくは自分の宝物をしまっていた。初めのうち、ぼくは自分の収集を喜んでたびたび仲間に見せたが、他の者はガラスの蓋のある木箱や、緑色のガーゼを貼った飼育箱や、その他ぜいたくなものを持っていたので、自分の幼稚な設備を自慢することなんかできなかった。それどころか、重大で、評判になるような発見物や獲物があっても、ないしょにし、自分の妹たちだけに見せるシュウカンになった。

ある時、ぼくは、ぼくらのところでは珍しい青いコムラサキを捕らえた。それを展翅し、乾いた時に、得意のあまり、せめて隣の子どもにだけは見せよう、という気になった。それは、中庭の向こうに住んでいる先生の息子だった。この少年は、⑥非のうちどころがないという悪徳をもっていた。それは子どもとしては二倍も気味悪い性質だった。彼の収集は小さく貧弱だったが、こぎれいなのと、手入れの正確な点で一つの宝石のようなものになっていた。彼はそのうえ、傷んだり壊れたりしたチョウの羽を、にかわで継ぎ合わすという、非常に難しい珍しい技術を心得ていた。とにかく、あらゆる点で、模範少年だった。そのため、ぼくは妬み、（ウ）嘆賞しながら彼を憎んでいた。

この少年にコムラサキを見せた。彼は専門家らしくそれを鑑定し、その珍しいことを認め、二十ペニヒぐらいの現金の値打ちはある、と値踏みした。しかしそれから、彼は難癖をつけ始め、展翅の仕方が悪いとか、右の触角が曲がっているとか、左の触角が伸びているとか言い、そのうえ、足が二本欠けているという、もっともな欠陥を発見した。ぼくはその欠点をたいしたものとは考えなかったが、こっぴどい批評家のため、自分の獲物に対する喜びはかなり傷つけられた。それでぼくは⑦二度と彼に獲物を見せなかった。

問一　傍線部（ア）～（ウ）のカタカナは漢字に、漢字は読みをひらがなで答えよ。

問二　傍線部①について、この部分からは周囲が暗い雰囲気になっていることが読み取れるが、これとは対比的な表現を本文から五字で抜き出せ。

問三　傍線部②とあるが、どのようなことが妙なのか。「…こと」に続くように本文から過不足なく探して、はじめと終わりの三字を書け。

問四　傍線部③の、指示内容を本文から七字で抜き出せ。

問五　傍線部④とあるが、ここで用いられている表現技法として、最も適切なものは次のうちどれか。

ア　擬人法　　イ　直喩　　ウ　倒置　　エ　反復法

問六　傍線部⑤とは対比的な表現を本文から四十字以内で探してはじめと終わりの五字を書け。